



Data

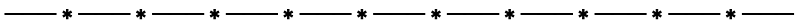
監督：マーク・ウェブ
 脚本：アラン・ローブ
 出演：カラム・ターナー/ジェフ・ブリッジス/ケイト・ベッキンセイル/ピアース・ブロスナン/シンシア・ニクソン/カーシー・クレモンズ/ティト・ドノヴァン/ウォーレス・ショーン/ジョン・ポールジャー/ビル・キャンブ

👁️👁️ みどころ

原題の『ニューヨークの少年』は、1970年のサイモン&ガーファングルのヒットアルバム『明日にかけの橋』に収録された名曲と同じタイトル。アラン・ローブの脚本をマーク・ウェブ監督が映画化した本作には、ニューヨークの街への愛がいっぱいだが、それを理解するにはそれなりの勉強が必要だ。

他方、私にもよくわかるのは、卒業を間近に控えた男が若い女と年上の女に迷い、自分の才能と将来の仕事に悩む姿だ。今ドキの若い男は恋愛も煩わしいそうだが、本作を観れば恋や仕事に悩むことの価値が理解できるはず。

もっとも、本作の結末には誰もがあっと驚くはず。評論家たちの評価は低いようだが、私は本作のそんな面白さに注目！



■□■原題は『ニューヨークの少年』。邦題と比べると？■□■

ニューヨークを舞台にした「恋愛もの」は、ウディ・アレンの「ニューヨークもの」を始めとして数多いが、サイモン&ガーファングルの年の大ヒットアルバム『明日に架ける橋』のB面3曲目に収められたナンバーである『ニューヨークの少年』をそのまま原題とした本作は、舞台となるニューヨークへの愛をたっぷりと捧げる中で、大学卒業間近の悩める青年トーマス・ウェブ（カラム・ターナー）の成長を描く物語。そう聞くとすぐ思い出すのが、ダスティン・ホフマンが主人公ベンジャミン・ブラドック役を演じた『卒業』（67年）だが、まさに『卒業』のベンジャミンも本作のトーマスも、大学卒業を控えながら自分が何者かわからず、恋に仕事にそして自分の将来に何の自信も持てない悩み多き青年だ。ベンジャミンの場合は年上の人妻ミセス・ロビンソンから露骨な性的勧誘を受け、それに

応じることによって大きく成長していった(?)が、さてトーマスの場合は?

本作は、アラン・ローブの書いた脚本がマーク・ウェブ監督の目にとまったことによって映画化が始まったものの、さまざまな障害の中で完成までには10年以上かかったそうだ。本作の後にアラン・ローブが脚本を書いた、スサンネ・ピア監督の『悲しみが乾くまで』(08年)(『シネマ19』245頁)等の公開が先になつたらしい。ウィキペディアによると、「本作に対する批評家の評価は芳しいものではない」そうだ。また、キネマ旬報5月上旬特別号の『REVIEW 日本映画&外国映画』では、「あとあと効いてくるのだろうかと思える意味深長な台詞が多数聞こえつつ、なかなか話の焦点は見せてこない。」「出版編集に携わる人物が出てくるけれど、彼らの未熟な言動は時代のせいかな。」等の否定的評価も目立っている。私にはニューヨークという街の切り取り方の是非はわからないが、私が目についた(耳についた?)のは、ことさら文学的表現やレトリックな表現が多いこと。登場人物が作家志望の悩める主人公トーマスをはじめ文学関係者ばかりだから、それはそれでわかるのだが、いささか鼻についた(耳についた?)のは私だけ・・・?

それもこれも含めて、原題の『ニューヨークの少年』はよくわかるが、邦題の『さよなら、僕のマンハッタン』って一体ナニ?こりゃちょっとヒネりすぎだし、ニューヨークをあえてマンハッタンに変えたのは、少し視野が狭すぎるのでは・・・?

■□■同級生と年上、どちらの女により興味が・・・?■□■

私の大学時代も、同級生の女と年上の女どちらがいい?そんな悩みがあったが、本作導入部では、一度ベッドインしたことによって、トーマスが自分では恋人と思っているミミ・パストリー(カーシー・クレモンズ)から、「あれは一夜だけの思い出。あなたはただの友達」と言われて大いに悩むトーマスの姿が印象的だ。しかも、ミミから「私にはバンドマンの恋人がいる」と言われた上、「自分はこれから海外に行くので、トーマスとは今まで通りいい友達でいましょう」と言われたから、トーマスが大きく落ち込んでいたのは当然だ。そんな中、ミミと一緒に出掛けたナイトクラブの中で、偶然トーマスは父イーサン(ピアース・ブロスナン)がセクシーな美女ジョハンナ(ケイト・ベッキンセイル)とデートしている姿を目撃したから、ショックを受けるとともに、ジョハンナに対する興味がメラメラと……。その後トーマスがジョハンナのストーカーのようになった表面上の理由は、何も知らない母親ジュディス(シンシア・ニクソン)を悲しませたくないの、ジョハンナに「父親と別れてくれ」と迫るためだが、さて、トーマスの別の本音はどこに・・・?アラン・ローブが苦労して書いた脚本は、トーマスのそこらあたりの心理描写がすごく面白いので、そこに注目!

ジョハンナはイーサンから息子の話を聞いていたし、たぶん写真も見せてもらっていたのだろう。そのためトーマスがストーカー行為を続けていたことがわかっていたから、それをとちめたものの、その直後にはトーマスをランチに誘ったから、アレレ・・・?こ

れは、ジョハンナがフリーの編集者の仕事をしていたため、出版社を経営している父親とのビジネス上のつきあいであることをトーマスに説明するためだったはず。ところが、同時にそこで「あなたも私に対して無意識に求愛している」等と挑発的なセリフを発するのが、アラン・ローブの脚本の面白いところだ。同級生のミミは美人で優秀だが、その全体像はいまやハッキリ見えてきていた。それに対して、目の前の美女ジョハンナは謎だらけの年上の女。こんな場合、さて男は（トーマスは）どちらの女により興味が・・・？まずは、その点に注目！

■□■少し奇妙だが、こんな人生の師は魅力的！■□■

本作に見る、トーマスと年上の魅力的な女性との出会いは唐突だったが、そんな可能性は常にあるもの。しかし、本作のもう1つのメインストーリーとなる、トーマスと、W・F・ジェラルドと名乗る謎めいた中年男（ジェフ・ブリッジス）との出会いは、少し奇妙でできすぎの感がある。

本作のパンフレットには、「3つの文化から知る、僕たちのニューヨーク」として、

①BOOKS ②MUSIC ③CINEMA が紹介されている。また、パンフレットの「ロケ地マップ」には、マンハッタンの地域ごとの特徴が詳しく紹介されている。トーマスの実家つまり父親イーサンの家は、ニューヨークの高級住宅地であるアッパー・ウエストサイドにあったが、トーマスはそこを飛び出し、南部のダウントウンに住んでいるらしい。その他、ニューヨークやマンハッタンの街並みの特徴について、本作の良さを理解するためには、これらの資料をしっかりと読み込む必要がある。

しかして、トーマスが住む家賃が最も安いダウントウンのアパートに、1人で引っ越してきたというジェラルドは一体何モノ？「君の悩みの相談に乗るよ」と声をかけてくる男はそもそも怪しげだが、ジェラルドの場合はその会話が意外に知的だったため、ミミとの恋に、そしてジョハンナとの新たな出会いに悩んでいたトーマスがジェラルドの部屋をノックしてみると、彼との会話は意外に快適なものに。家具も何も置いていない部屋の中は殺風景だが、ジェラルドとの会話の中でトーマスの心の中にはさまざまな新たな情景が広がっていくことに・・・。

そこでのジェラルドのトーマスに対するアドバイス（殺し文句）は、「人生に身を委ねろ。窓を見つけて、飛び出せ」だ。『卒業』でダスティン・ホフマン演じるベンジャミンはミセス・ロビンソンから文字通り「卒業」した後、クライマックスではキャサリン・ロスが演じた他人の花嫁になろうとするエレーンを奪い取るという形で窓から飛び出したが、さて、ジェラルドの言葉を受けたトーマスは、どのように窓から飛び出すの？

■□■「ニューヨークの少年」の著者は誰？■□■

私は日経新聞の「私の履歴書」の愛読者だが、これはすべてゴーストライターが書いて

いるため、ゴーストライターの名前は全く表には出てこない。しかし、ユアン・マクレガーが主演した、ロマン・ポランスキー監督の『ゴーストライター』(10年)では、あるゴーストライターがアフガン戦争とイラク戦争を主導した元英首相の自叙伝を書いていたが、いくらゴーストライターでも真実を書くためには調査が必要。しかし、素人探偵も度が過ぎると……。同作は、そんなハラハラドキドキの緊張感とCIAの暗躍ぶり(?)が面白い映画だった(『シネマ27』143頁)。

しかして、トーマスが留守中のジェラルドの部屋に入ってみると、机の上には「ニューヨークの少年」と題された小説の原稿があったから、ビックリ!「ニューヨークの少年」とは、ひょっとして俺のこと?ジェラルドはこの小説の取材のために俺に接触し、俺とミミ、俺とジョハンナ、俺と父親との物語をネタにしてこの新作小説を執筆していたの……?そんな疑問を持ったトーマスがジェラルドのことを調べてみると、この男は一匹狼的な行動が目立っているものの、れっきとした有名作家だったから、さらにビックリ!

父親のイーサンは若い頃に「自分には才能がない」と作家への夢を諦めたうえで出版社の経営者に転身したが、トーマスが書いた小説については、その父から、「無難だ!」と言われて突っぱねられていたから、トーマスも自分の作家としての才能には自信を失っていた。しかし、ジェラルドにその原稿を見せると、「君には才能がある」と言ってくれたから、トーマスは少しずつ自信を取り戻すことに。そして、それが得体のしれない中年男の言葉ではなく、有名作家の言葉だとなると、なおさら自信になるはずだ。もし俺に作家の才能があったら、大学を卒業した後、その道一本に進むことも可能なのでは?ジェラルドが有名作家で、今自分をモデルにした「ニューヨークの少年」を執筆中だと知ったトーマスの胸の中には、そんな新たな希望が湧いてきたが……。

しかして、トーマスは父親が毎年開催している出版関係者を集めたパーティにジェラルドを招待したが、さて彼は出席するの?本作中盤から後半にかけては、ジェラルドをめぐるそんな謎めいた展開に注目!

■□■「俺はあんたの彼女と寝た!」は父子間で最悪の会話!■□■

トーマスとジェラルドとの男同士の関係は、ジェラルドが有名作家だということがわかる中で前向きに展開していく。しかし、トーマスとミミ、トーマスとジョハンナとの「三角関係」、さらにイーサンとジョハンナとの「不倫関係」の処理は大変だ。日本では新潟県知事・米山隆一の「金で女を買った」問題は、知事の辞任表明でケリがついた。また、財務省の福田淳一次官のセクハラ問題も、今はまだ頑張っている(居直っている)ものの、早晚、次官の辞任でケリがつくだろう。しかし、本作に見るジョハンナはトーマスとは別れ、父親とも別れると宣言していたが、さて、その実行は……?そもそも本作では、トーマスとジョハンナが唐突にキスしたり、その後もいとも簡単にベッドインするストーリーに少し違和感があったが、それはそれで納得できる範囲内だった。しかし、その後もジ

ジョハンナがトーマスとイーサンとの二正面関係(?)を従来通り続けていたようだから、それはかなりの根性で、男の私には少し理解が難しい。

他方、トーマスがジョハンナとの関係に自信をつけてくると、同級生のミミの存在感は徐々に弱くなってきたらしい。そのため、意外にズケズケと「僕はジョハンナと寝た」と告白したから、「あなたはそんな人じゃないと信じていた」と言いながらもミミは大ショック。なるほど、なるほど、ここらあたりの男と女の駆け引き(?)や心理描写は面白い。しかし、「あなたとは別れる」とハッキリ宣言されたトーマスがジョハンナを諦めきれず、ある日、意を決して父親のオフィスに乗り込み、父親に対して「俺はあんたの彼女と寝た」と言い切ると、父親は・・・?また、その場に入ってきたジョハンナもトーマスのその言葉にはビックリだが、イーサンの目の前でそれをハッキリ否定できないことは、すなわちその肯定・・・?息子トーマスの父親イーサンに対する「俺はあんたの彼女と寝た」発言は親子間で最悪の会話だが、ジョハンナがそれを否定しないことによってすべてを察したイーサンは、さあこれからどうするの?そしてまた、これによって父子間の関係が最悪になったイーサンとトーマスのこれからは・・・?さらに、ジョハンナは・・・?そして、ミミは・・・?

■この結末にビックリ! アラン脚本が売れた理由がここに■

音楽でも野球でも、父親は超一流だが息子はダメというケースはたくさんある。しかし、元総理大臣・小泉純一郎の息子の小泉進次郎のように、息子がしっかり父親の才能を引き継いでいるケースも多い。しかし、イーサンはもともと小説を書く才能がなかったのだから、その息子トーマスにもその才能がないのは当然。本作前半のストーリーはそういう前提で作られていたが、そこに、当初は奇妙なおじさんだったジェラルドが、実は才能豊かな著名作家だったことがわかり、トーマスにもそれと同じような作家としての才能がありそうなことがチラホラし始めると、何となくクライマックスに向けて意外な展開になりそう・・・。

本作前半では、父親イーサンと息子トーマスの「父子対決」が何かと目立ち、母親ジュディスは蚊帳の外に置かれていたが、ジュディスが躁うつ病になっていたのは一体なぜ?トーマスは「こんな母親に、父親とジョハンナの不倫関係を知られては・・・。」と躍起になってそれを阻止しようとしたが、母の躁うつ病の原因は実はもっと根深いところにあったらしい。本作のクライマックスに向けては、イーサンの部屋に飾られていた、テニスで活躍する息子の記事に載っていた写真の観客席に、ジェラルドの顔が写っていたことから、ある重大な疑惑(?)が急浮上してくることになるから、それに注目!

近時、DNA鑑定の精度が増している。しかし、あまりに自分の息子が自分に似ていないことに疑惑を抱いた元光GENJIの大沢樹生が、元妻である女優・喜多嶋舞との間に生まれた16歳の長男についてDNA鑑定をしたところ、「父子確率0%」という結果が

出されたことが2013年のニュースで報道されていた。そんなニュースを見ていると、ひょっとして本作のクライマックスに向けても、そんな展開が・・・？いやいや、そんなバカな・・・。ネタバレ厳禁だからこれ以上は書けないが、本作の結末にはビックリ！なるほど、アラン・ローブの脚本が売れた理由がここに！

■□■「大阪の少年」の10年後は？50年後の今は？■□■

本作はラストに至って、「ネタバレ厳禁」のトーマスの出自に関する「ある秘密」が明らかにされるから、それに注目！それによって、トーマスに「俺には作家としての才能があるんだ！」という自信が生まれれば幸いだが、さて彼の気持ちの変化は・・・？他方、ジョハンナはイーサンともトーマスとも別れると宣言していたが、仕事もできるし、女としての魅力もいっぱいだから、ホントにそんな枯れた生き方(?)ができるの？それも注目点だ。しかして、本作では登場人物たちの1年後の生きざまが少しだけ知らされるのでそれにも注目だが、それを超えて、本作の主人公たるトーマスの10年後は？さらに50年後はいかに・・・？

私は大学卒業を控えて悩んでいる中、トーマスとは違ってたまたま司法試験の道を発見したため、それまでの学生運動生活ときっぱり縁を切り、世間の交際も断って孤独な受験勉強に没頭した。そのおかげで一年半余りの勉強で合格できた私は25歳で弁護士になり、5年後には独立し、10年後には都市問題を中心とするライフワークも確立し、前向き、拡大路線をひた走りに走り続けた。もっとも、今でも私は弁護士を天職だと考えているが、1974年の登録から2018年の今日までの44年間は決して順風満帆だったわけではなく、離婚問題、懲戒問題、税務署問題等があったし、2015年夏には大腸ガン発覚という健康問題も発生した。

このように「ニューヨークの少年」ならぬ「大阪の少年」だった私の10年後があり、また50年後の今があるわけだが、さてトーマスの場合のそれはいかに・・・？本作の結末を超えて、更にそんな先まで想像するのも面白いと私は思うのだが・・・。

2018(平成30)年5月1日記